
異世界影日記

毒弦竹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界影日記

【Zコード】

Z2298BA

【作者名】

毒弦竹

【あらすじ】

テンプレ通りのような事件を経て、浪人生が異世界に転生。転生
先は影族という雑魚魔物。魔物や魔族が人間のように集落を作る世
界でほのぼのと毎日を過ごす主人公の日常を、ゆったりと楽しんで
ください。

一日目。

異世界に転生した。

経緯を簡単に説明すると。

- ・大学の合格発表、志望校に落ち失意の内に帰宅。
- ・道中トラックに跳ねられ死亡。
- ・それは神さまのミス。なんか剣と魔法の異世界に転生させてくれるらしい。

はいはい、テンプレテンプレと一笑の内に切り捨てられそうだが事実だから仕方ない。正直助かった感はある。実は俺三浪目で、今回受からなければ家を追い出されることになっていたのだ。バイトもしてなく貯金の無い俺が家を追に出されたら遠くない未来死んでいただろつ。だからどうせ死ぬなら強くてニユーゲームする方が良い。記憶の引き継ぎは、異世界であれ大きなアドバンテージになるだろう。ソースはネット小説。ふふ、俺も主人公デビューか。燃えてきた！

神さまミスしてくれてありがとう！

新しい両親のもと、俺は俺らしく生きていこうと思つ。

……ただ、なんか両親黒くないか？

黒人というレベルじゃなくて、そう例えるならドラクエのシャドーみたいな……。ペラッペラだよ、ペラッペラ。

一日目。

俺の転生先が分かつた。影族という魔物の一種のようだ。両親の会話を聞いて把握した。何故か分からんが、言葉はなんとなく理解できた。ご都合主義？　いやいや、神さまの粋な計らいとしておこう。

それより問題は魔物に転生したといつ点だ。なんというか、てつきり人間だと思っていたなんだけれど。

まあ、生まれてしまつたものは仕方ない。とりあえず今の所は流されるままにしておく。幸いにも影族は生まれてから三日で赤子から子供になるらしい。今の俺の姿はサッカーボールくらいの影の塊なのだが、これが両親みたいにペラツペラな体になるようだ。明日が楽しみである。自分で歩き回れる的な意味で。うむう、なんとも不思議な種族だろうか。

それより母親はさつきからミルクを俺の体にかけているのだが何がしたいのだろうか。

……まさか授乳とは言つまいな？

三田里。

ついに体が成長した。両親のようにペラツペラな体に。足はなく幽霊のようにふよふよと浮かべる。嬉しいのだけど嬉しくないという微妙な気持ちだ。

とりあえず現状把握のために両親と会話してみた。すると、彼らの知能レベルは前世の人間並にあつたことが判明した。おお、良かつた。獣レベルだったらどうしようかと思っていたし。まあ昨日会話しているのを聞いていたから、少なくともそれは無いと考えていたけど。

さておき、両親との初コンタクトで俺は名を授かった。「カゲロウ」……縁起でもないネーミングだった。両親は俺を七日で死なずつもりだろうか？

思わず頬がひきつった俺を誰も責められやしないだろ？。頬がどこにあるかは別として。

そうそう、言葉が理解できる理由が判明した。なんでも影族は念話なんてもので会話をするらしく、それで俺も理解できたのだとか。影族、チートなのか？

今日一日は両親と会話をして過ごした。

七日目。

こここの世界観把握に四日を費やした。両親に聞いたり、外に出たりして情報を集めた所、

- ・剣と魔法の異世界である。
- ・人間と魔物、魔族は敵対している。
- ・勇者もいるし魔王もいる。
- ・魔物や魔族も人間のように集落を作っている。
- ・現在人間との大掛かりな戦争は一時休戦中。十年くらい大規模な戦争は起きず、魔の森とかいう広大な森を国境ににらみ合いが続いている。

つまり、今は戦時中って訳ね。でも休戦中だから当面は命の危険はなし、と。

安心したけど安心できない。あまり争いごとに巻き込まれたくないなんて思つてみたり。徵兵されない限りは大丈夫だろ？……

多分。

都会はピリピリしているのだろうが、俺の生まれた村はど田舎。ほのぼのとした空気が流れている。住んでいるのも影族だけじゃなく、スライム、アンデッド、オーク……例をあげると切りが無い。多民族国家？ みたいなものだ。

因みに魔物と魔族の違いは、「格」の違いらしい。なんていうの？ 存在感が違う？ ラティッシュと初めて対峙した悟空の気持ちといえば分かるか。コイツは、俺とは違うみたいな。

つまり、格イコール「畏怖」なのだ。

魔族が貴族で、魔物が平民って認識で大丈夫だろう。

そういうや、俺の家の隣が人狼族つて魔族のお宅何だよね。両親なんて隣から音が聞こえてくる度に体を震わせるもん。えつ、俺は怯えないのかだって？

前世がオタク気質だった俺は、彼らを遠目から見たとき怖いとうより興味深いと思った。近寄り難いなーとは感じたけど。だって犬耳だよ、犬耳。かーいいじゃん。

聞いた所によると、この世界における影族の立場は低いから彼らと関わることは無いんだろうけどね。ちょっとびり残念。

八日目。

家の手伝いで近くの川に水を汲みに行つた。水の入った桶を持ち歩くのは一苦労。俺の体が小さいつてのもあるが、影族は悲しいことに筋力が無い。だつて影だし。異世界モノでお馴染みの無双ができないのは残念だ。そして、記憶を引き継いでも何にも出来ないことが分かった。肥料の作り方？ 調味料の合成？ 内政チート？

無理無理、俺ただの浪人生。

平凡にこの村で生きていくんだろうな……。うん、それもありだな。

えつちらほっちらと休憩をはさみながら家に帰ろうと、ふよふよと浮いていると、切り株につまらなさそうに足をぶらぶらさせる幼女を発見した。

犬耳……ああ、お隣の娘さんか。しかし何故にこんな場所に。あ、目が合つた。とりあえず頭を下げてみると、幼女もちょこんと頭を下してくれた。

可愛らしい、けどお近づきになれないのが残念だ。そのまま俺は家に帰った。

九日目。

今日も両親の手伝いで水汲み。帰り道でまた幼女にあつたので頭を下げるべく。

十日目。

今日は手伝いをしなくて良いと言われたので、広場に遊びに行く。村の広場には沢山の子供が集まっていた。思い思いの遊びで盛り上がりついて、ちょっと輪に入りにくい。「ミニミニニーケーション能力が欲しいなー切実に。

手持ち無沙汰に佇んでいると、なにかが体当たった。視線を下げると液体状の塊が俺の体に体当たりしている。どうやらスライムのようだ。しかし、なぜスライムに体当たりされているのか？ 腕組みしながら考えてみると、スライムはぴきーと声を出した。なにがしたいのか分からぬ。

影族の念話を使って「遊びたいの？」とたずねてみれば、体から一本触手を出して器用に丸を作った。……なにコレ面白い。触手を触つてみると、ひんやりと冷たかった。さわさわとスライムの体を撫でてみる。ぴきーと嬉しそうに鳴いた。……猫みたいだ。

一日中スライムをこねくり回して遊んだ。本人は嫌がっていなかつたから良しとする。
友人、ゲットだぜ。

十一日目。

お手伝いしようとしたが、今日は遅く起きてしまったため先に親がやつしまっていた。

することが無くなつた俺は広場に行き、昨日のスライムと戯れることにした。

ぴきーぴきーと鳴くスライムに癒されて撫でていると、口ロ口ロとボールが転がってきた。

それを拾つて、持ち主の蝶の羽が生えた少年に返してあげる。恐らく妖精だろう。少年はありがとうと礼を言つと、俺たちをボール遊びに誘つてきた。俺はスライムを見ると、触手を出して丸サイン。許可が出たので、少年のグループと一緒にボール遊びをした。ボール遊びなんていつぶりだろうか。

友人が増えた。この調子なら友達百人できるかね？

十二日目。

今日は久しぶりに両親の手伝い。川で水を汲む。

帰り道、あの犬耳幼女がやつぱり切り株に腰掛けつまらなさそうにしていた。……いつもなにやつてんだ？ 話しかけようとしたが、俺は現在お手伝いの真っ最中なので断念。

目があつたので一応礼だけして帰ろうとしたが呼び止められた。

「ね、ねえ！ お話ししない？」

なんと。お話ししたいのは山々だが、水がないと両親は困ってしまう。影族の食べ物は水なのだ。俺は少し悩んでから断ろうとしたが、あんな泣きそうな目で見られたらしようがない。幼女のお話につきあうことにして。決してキュンときた訳ではない。キュンときた訳じやないんだからね！

随分と長く話し込んでしまった。太陽が頭の上に登っている。朝早くからだつたから、四時間くらいか？ 幼女の話はどうまることが知らず、一向に終わる気配が無い。埒があかないでの俺が帰る顔を伝えると、幼女はじわっと涙目になった。

「やだ

「やだやだ！」

でも、水を両親に届けないと。

ごねはじめて、今にも泣き出しそうだったのを必死に宥め明後日遊ぶことを約束して俺は家に戻る。

家に帰つた俺が見たのは、干からびかけた両親の姿だった。しなびたレタスのようになつてている両親に、慌てて水をかけて復活させるとしこたま怒られた。

すまん、父母。幼女の涙には勝てなかつたんだ、俺は。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298ba/>

異世界影日記

2012年1月5日21時51分発行